

三尾重定編輯

新編小學讀本第九

178  
4  
91

館籍書會育教本日大			
	三		二
九册	三號	二架	六函

新編小學讀本第九

新編小學讀本第九

三尾重定編

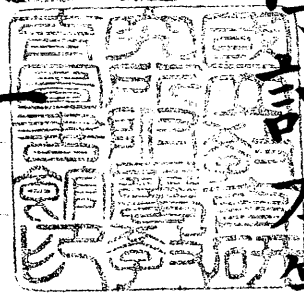
新編 小學讀本第九

東京 教育書院藏

明治十九年六月十二日 内務省頒布

新編 小學讀本第九

第一



三尾重定編

師匠父母の我を嘖るハ。我に學藝  
智識をあたへて。その徳望を得せ  
しめん。ふ爲なる。然に。其命をまら

新編 小學讀本 第九

教育書院

る。此を能ず。或まゝ。師匠父母の面  
前へ出る。此をを厭ふ。小兒ハ。終に  
其身の方向を誤りて。困窮卑賤ニ  
おち以る。此をあるべし

古語に。益者三友。損者三友。といふ  
事也。ある。此ハ。一。正なる人。  
直諫なる人。或また。その見聞ニ富

たる人に交るとまゝハ。我に益あり。  
僻事となす人。口弁を以て。此とを  
まぐる人。善や惡とを擇ぶ。此とま  
く。たゞ。其人の言語につくが。此を  
ま。氣骨のなき人。又交る時ハ。かな  
らざ。我に損ありとなす  
人ハ大抵。口ガ言ニ從フ者ヲ好こ。

我言ニ逆フ者ヲ忌キラヘルハ。是  
ソノ智識ノ足ザルガ故ナリ  
汝等ヨクコレヲ思ヘ。我ニ從フ者  
ハソノ學ソノ智ノ我ニ及ザルニ  
由ニアラスヤ。其學其智ワレニ及  
ザル程ノ人ニ親ミ交リテ。何ニカ  
センヤ。苟モ學識智徳ヲ高クセント  
思ハゞ好デ我ニ抗スルホドノ人  
ヲ友トスベシ

第二

朋友ニハ種々の名あり。あるひハ  
金蘭。或腹心。或刎頸。或忘年。或口頭。  
或竹馬の類なり  
兒輩よ。近く來るべし。余汝等に。朋

友の故事を語りま  
かす。慮し

金蘭とい。金と蘭との  
二ふして。金ハ堅く。

蘭ハ芳し。され  
バ朋友。ホ、福と  
和げ交る時ハ。其ホとば



のかうばし。ま。少。蘭の如く。また  
災殃よあひ。互に死力を竭して。防  
ぎ助る其勢ハ。金鍔の如く。堅ま  
な。里。故に。ホれを金蘭のま。は。里  
と。以。ふ

腹心とい。互に隔なく。親み交りて其  
心と一に。ま。る。お。故に。ホ。ま。と。稱し

て腹心といふ

刎頸といひ。たとひ頸を刎らるゝと  
も。其人の爲まひ。老まゝも厭ひさ  
けざる。といふを以テまを名づけ  
て。刎頸の友といふ

忘年といひ。其學其技のまを就て。  
齡の多少を論ぜるまをなく。老少

志たしく交る故に。忘年の友とい  
ひへるなり

口頭といひ。意の相あひざれども。言  
語の上ふて。親くまると。口頭のま  
まはまといふ

竹馬といひ。幼稚の時よま。あひ親み  
て。永くまゝ。孩の變らざるを。竹馬

の友とハ。名づくるなるなま。され幼少  
のとき。竹馬に乗て。共に遊び。ゆ  
急なるべし

### 第三

尺蠖トイフ蟲ハ。其形カヒコニ似  
テ。木葉ヲ喰ヒ。老レバ則室ヲ造リ  
テ。其中ニ入り。終ニ化シテ。蛾トナ

ルナリ。此蟲サキへ出ントスルニ  
ハ。首尾ヲ合セテ。屈シテ後ニ伸ル  
ナリ。其狀人ノ大指ト食指トヲ以  
テ。物ノ尺ヲ量ルガ如シ。故ニ名ヅケ  
テ「シヤクトリム」ト云。人モ亦カ  
クノ如ク。其志ヲ達セント思ハビ。  
夙ニ起キ。夜ニ寢テ。心ヲ碎キ。身ヲ

痛ム。ヨク其艱苦ニ夕へ忍ビテ。屈伸ノ理ニ違フ。勿レ多くの童子。雨の降るを詠め居り。一人の小兒。老人の前へゆき。雨の以かにして降るものなまや。と問けまば。老人その兒を顧て。汝ハ賢きものなま。余汝の爲に。其理を

語り聞さべし

凡物の無盡性と以ひて。盡るまや。なま者なま。然ども。他の力によるて變化するまや。常なりとす。譬ば。火鉢にかけたる鐵瓶の水と。看よ。はしめ。鐵瓶一杯に満たき。ども。其湯のわきあがるに隨て。漸



に減少し。愈沸騰して止ざる時ハ。遂にすゝみの水も無きに至る。其水全きえ失たるにあらざ。外物の爲に變化して。みな空中にとび



散るなり。雨ハ則ちの理よりて。地中の水氣。空中より上り。冷氣に遇て。雨となして。降るものなり。とぞ教ける

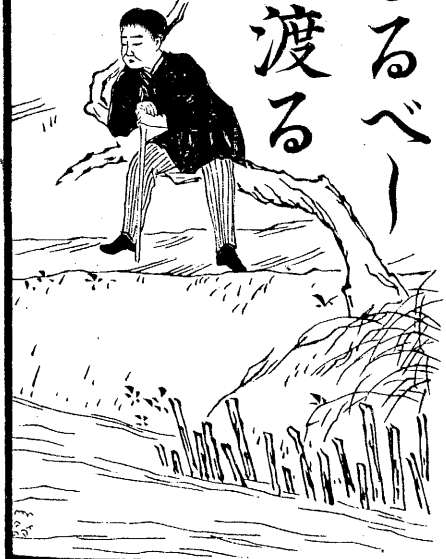
第三

氣候ハ四時ニヨリテ。寒温冷熱ノ差アリ。サレバ。人ノ衣服モ。亦コレ

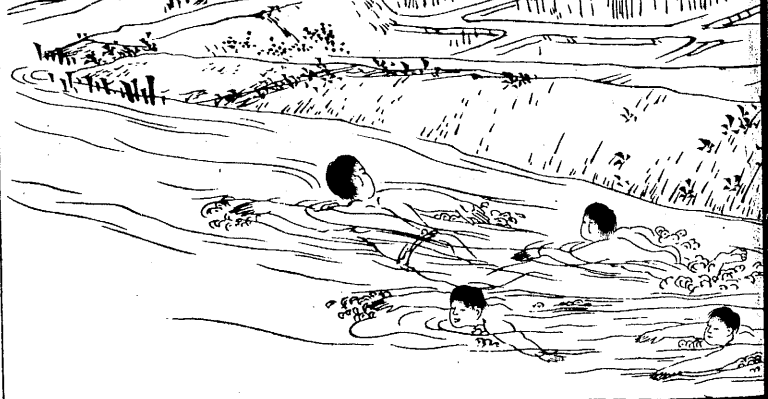
二隨ハザルベカラズ  
衣服ノ染色ニハ種々アレドモ夏  
ハ多ク白キヲ用斗冬ハ多ク黒キ  
ヲ好ムハ皆ソノ基ク處アル故ナ  
リ。或コレヲ試験シテ白色ハ太陽  
ノ熱ヲ遠ザケ黒色ハ其熱ヲ引ノ  
性アルヲ發明セリ

其試験の方法ハ二の皿に氷を毛  
り。一方ハ白色の布をおほひ。一  
方ハ黒色の布を用ゐて均く氷  
まを日光に曝せしに白色の布を  
覆ひたる皿ハ其氷とくることお  
そく黒色の方ハその融るまと速  
なりといふ

數多の人。流まを冒して游泳せり。  
 大人あり。小童あり。一人の壯士。岸  
 に上りて。兒童の方に目を注ぐ。是  
 その游泳の師なるべし。  
 此の技。海河を渡る  
 事と業とを志る  
 人の勿論。それよ



か、ららざる人。と以へ  
 ども。不慮の水害  
 にか、は、は、あ  
 る。緊要なる  
 事。一術なり。されむ  
 汝等。夏日學校の休  
 暇なぞ。よ。宜く



此の技を學ぶべし。然れども、此を習ふに、必、此の業に熟練せる。大人に従ひて、其教を受く。極まり。否む。たゞに其業の、以つら事と、其命を失ふに至る。此やあるべし。

#### 第四

多クノ人。一室ニ會スル時ハ。ヨクソノ窓ヲアケ放テ。空氣ノ流通ヲ謀ルベシ。人々吸フトコロノ酸素ト云モノハ。躰中ノ炭素トイヘルニ混合テ。炭酸瓦斯トナリ。復口中ヨリ出ルモノナリ。此氣漸、室内ニ盈ルトキハ。或、眩暈頭痛ヲ發シ。或

マ夕嘔吐ヲ催シ甚キニ至テハ卒  
ニ倒テ一時ハ前後ヲ覺エザルニ  
至ルサレバ學校ソノ外一室ニ在  
テ衆人同ク會スル所ニテハ時々  
戶外ニ出テ新シキ空氣ヲ呼吸ス  
ベシ其家煉瓦ニシテ窓ニガラス  
ヲ用ニタル室ナドニテハ殊ニ意

ヲ注グベシ

人の身躰ハ強弱を論せば常に沐  
浴して其身を洗ひ清むべし。凡て  
身躰よハ小き孔ありて其身よ熱  
を發する時ハかならず汗の出る  
ものなり。汗以づまハ熱散ドて快  
し。然に沐浴を怠る時ハ垢の爲よ

孔ふさが里て。汗以て。故に。其熱  
うち箆りて。遂に病をひきおこ  
すに至るべし

第五

運動ハ。身體の血液をめぐらして。  
其身の成長を助るのみならず。病  
をさる。元氣をほして。精神つねよ

爽快なり

然ど。人の身體

よハ。天稟の強

弱あり。一運

動して。其身の

適度をあやまつ

時ハ。身躰つかまて。おれお爲に。病



を起さざればやあるべし  
さきば。其身の剛柔を慮りて。よく  
其動止に注意をせよ。その疲勞を  
救ふよ。休息と睡眠とのみ  
休息ハ。四肢ノ疲ヲ回復シ。又ヨク  
消化機關ノ運用ヲ助ルモノナル  
ガユエニ。運動シタル後ニハ。カナ

ラズ務メテ休息スベシ  
睡眠ハ。身心ヲ安カラシメテ。身体  
ヲ養フノ効。最多シト爲ストイヘ  
ドモ。ソノ眠ル。多時ニ涉レバ。反  
テ害トナル者ナリ。殊ニ食後ハ。消  
化機關ノ運轉スル。極テ微弱ナ  
ルモノナレバ。決シテ眠ニツクコ

トナカレ  
 人にかゝらば其質と異ふは故に。  
 その性質と。その習慣とによつて。  
 休息及睡眠の時を減じて。専らその  
 業を勉強せんと雖。敢て其身に。苦勞  
 を覺えざる者あり。斯の如き人ハ  
 老衰と來せしむ速なるを。或ま

輕症の病よかりて。頓に其死を  
 以たせしむるべし  
 斯の如く説き來まば。怠惰と以害  
 なき者と爲せに似たまごも。決  
 て然らば。休息と睡眠とに。夥多の  
 時間を費せしむ。筋骨ゆるみて。  
 精神鈍く。生涯懶惰の廢人となり。



K110,8-68-2

編小學讀本 第九

空、歲月を送る故に。貧窮困苦その  
身を責て。惡心妄想されより發り。  
終、ハ貴き天壽を乞。全、老る六、七  
を得ざるに至るべし。恐れ慎む處  
き、六、七にあらざや

新編小學讀本第九畢

板權免許 明治十九年  
一月廿五日  
再版御届 同 年  
五月廿八日

定價金五錢五厘

編輯者 愛知縣士族 三尾重定

出版者 東京府士族 岩田富美

出版并 東京府士族 吉澤富太郎  
發賣人 本所區松井町三丁目十番地

